

ノルウェーの暮らしと 修士留学の紹介

オスロ大学修士課程
特別支援教育専攻
河村晏奈

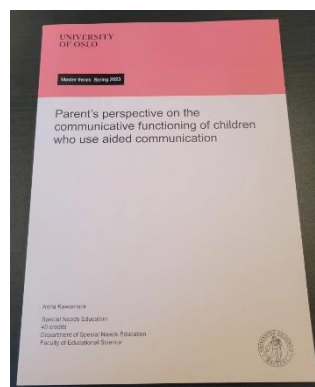
埼玉親善大使レポート2022年度①(修士論文編)

自己紹介: 2021年8月より、ノルウェー・オスロ大学 (Universitet i Oslo) で計2年間の修士留学をしている河村晏奈と申します。日本の大学の教育学部を卒業し、教員経験を経たのち、オスロ大学の修士課程で特別支援教育について学びました。2022年度「埼玉発世界行き」奨学生に選出していただきました。今回は修士論文で執筆した内容とその過程で行った活動について紹介したいと思います。



卒業式典では、一人ひとり名前を呼ばれてバラを受け取りました。写真は、同じ修士課程の学生たちと。

6月初めに修士論文を提出し、卒業式典にも出席してきました。修士論文は、プロジェクトに参加して1年かけて取り組みました。論題は『親の視点から見た、拡大代替コミュニケーションを使用する子どものコミュニケーション機能』です。



修論監督のサポートを受けながら書き、100ページ近くになりました。論文は学術誌に載せるための準備を進めることになり、夏の間は新しいデータも加えて分析執筆し直しになりました。

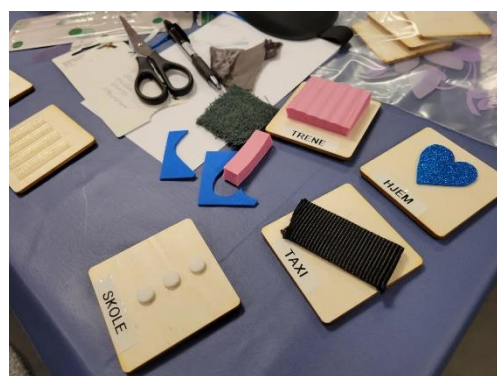
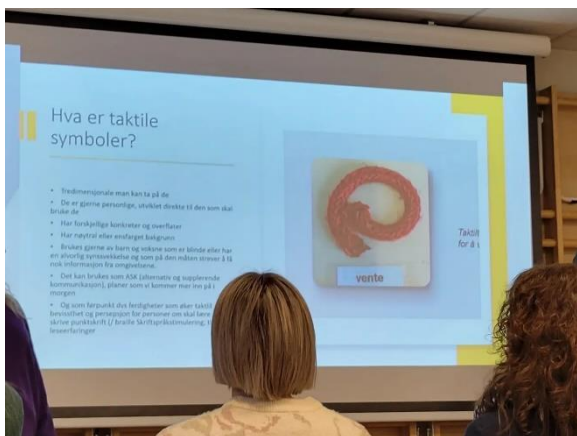
修士論文では、補助代替コミュニケーション (AAC-alternative and augmentative communication) について執筆しました。AACは、話し言葉を使うことに困難を抱える人達のための、発話以外のコミュニケーションの方法です。以下、AACを学ぶために行った活動について紹介します。



ISAACというAACに関する国際的な組織の、ノルウェー支部のカンファレンスに参加しました。AACの研究や実践に関する様々なプレゼンテーションが行われました。様々なAACの製品を開発している会社の展示もあり、実際に会社の人からどうやって活用するのか聞くことができました。一番印象に残っているのは、実際にAACを使っている障害のある人たちとの座談会です。わたしも相手も声を使った会話は禁止で、コミュニケーションボードや発話機器を使って会話する、という企画でした。発話ができないことの不便さ、身体が不自由な中でこういった器具を使う大変さ、コミュニケーション支援の大切さを身にしみて感じました。

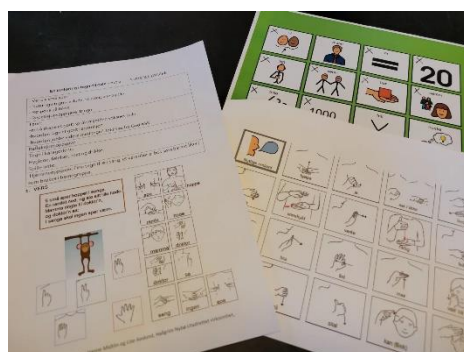
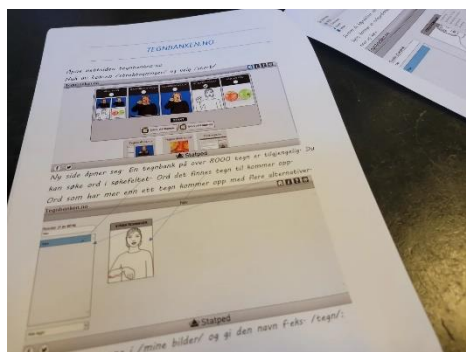


Statped というノルウェーの特別支援教育の支援機関が主催する触覚シンボルの講習会に参加しました。触覚シンボルも AAC のひとつで、認知や肢体の障害に加えて視覚聴覚にも困難を伴う人へのコミュニケーション支援に使われます。将来点字を学ぶ子どもにとっては、手を使って「読む」ことの実験にもなります。



講義以外にも、音や人の動きなどの環境を目の見えない状態で体験したり、目が見えないペアの人に普段の支援をしてフィードバックを受けたり、実際にいろいろな材料から子どものニーズに合わせてシンボルを作ったりできて、充実の2日間でした。こういったシンボルは、子どもが実際に使っている物の素材などに合わせて作られます。学校でも一般的に使われています。どんなに重い障害をもつ人に対してもコミュニケーションを重要視するノルウェーの特別支援ならではだなあと感じました。

会話のためのハンドサイン (Tegn-Til-Tale) 初級者向け講習会にも参加しました。ハンドサインは手話と似ていますが、手話は音声言語の代替として使われるのに対し、ハンドサインは音声言語の補足として使われます。会話の中のキーワードをハンドサインでも並行して示すことによって、喋り言葉だけでは理解が難しい人の助けになります。



右のイラストは、ISAAC のホームページ <https://isaac.no/> から引用した「コミュニケーションの権利」です。ノルウェーの教育がコミュニケーションを大切にしていることがわかります。以下はいくつかの例です。

- 選択肢を与えられる
- «ノー」と言ったり、物や行為を拒否したりする
- 聞いてもらったり応えてもらったりする、たとえ答えが«ノー」だったとしても
- 身の回りの人々や物、出来事について知る
- 自分のコミュニケーションサポート機器が常に使用可能である
- 自分のコミュニケーション形態について学び、それを利用して学習する
- 尊敬と尊厳をもって扱われる
- 自分«について»ではなく、自分«と共に»話される

